

九月二八日（木）

ハッピーアワーというには早過ぎる時間帯にも関わらず、地元醸造のビールスタンドは賑わっていた。表にこそ待合席を兼ねたベンチが置いてあるものの、一階の入ってすぐのスペースも、ちよつと急な階段を登った先の二階のスペースも基本的には立ち飲み席しかない。

それでも、いくつか設置された無骨なテーブルは半分以上埋まっていた。カウンターにはりついて、店主や店員とズーツと喋っている人もいる。「どれにする？」

僕を先導して来た武藤さんが、カウンターのメニューを指した。個性的な名前とそれぞれの特徴が書いてあるものの、違いはよく分からない。悩んでいる僕に、お店の人がそれぞれ解説してくれるものの、クラフトビールに明るくない身には、イマイチピンとこない。

「じゃあ、二番で」

「どうやら一番スタンダードっぽいものを選ぶ。武藤さんはメニューを見て、

「一番新しいのは、コレだっけ？」と店員さんに確かめる。

「じゃあ、二番とソレを大きい方にしちゃう？」

武藤さんは心底楽しそうに、ニヤニヤと笑っている。

「一応、まだ仕事するんですね？」

「だいたいじょうぶだつて。度数は高いけど、ビール一杯や二杯」

武藤さんはカウンターの店員さんに「ねえ？」と同意を求めた。オーダーを待つ彼は、曖昧に笑って受け流す。結局、武藤さんは「どっちも大きい方で」と押し切ると、二人分の金額を現金で支払った。

すぐに大きなグラスにビールが注がれ、カウンターの向こうから差し出される。

「それ、森田さんのだから」

武藤さんはすぐ後ろのテーブルを指して、「そこで、いい？」と店員さんに確かめた。向こうは、もう一杯のビールを差し出しながら、「どうぞ」と応えた。「じゃあ、オレがこっちにしようかな。森田さんはそっちでいい？」

彼はカウンターの真後ろに陣取り、僕はその隣、壁を背にする位置に立った。

「カッコ良かった奥さんと、肚を決めた森田さんに」

武藤さんは僕の準備や反論を待たず、一人で僕のグラスに乾杯し、早々にビールに口をつける。喉を鳴らしながら、最初の一口でグイグイ飲んでいく。

「いやあ、美味いつ。お彼岸も過ぎたけど、最高だよね」

彼にワntenポ遅れる形で慌てて一口飲んでみる。ガツンと強めの苦味が確かに美味い。「いつも、ありがとうございます」と店主の奥さんらしい人が、うずらの燻製らしきものをテーブルに持って来てくれた。武藤さんは自然に爪楊枝を取り、一個を口に放り込んだ。彼の圧に負けて、僕も同様に後追いつする。

「本当にやりたいよね、一万部。可能なら、もう一桁」

「まあ、まずは千部をクリアしなきゃですけど」

「行ける、行ける。肚を括った編集長が、弱気でどうする」

武藤さんは、少々強めに僕の背中を叩いた。まだビールを一口飲んだだけなのに、さつきからかなり酔っ払っているような気がする。僕は自分のビールを零さないようにバランスを保ち、少しでも中身を減らすべく口をつけた。

普段より少々声の大きい武藤さんが気になるのか、店員さんが僕らの話に、興味深そうに耳を傾けている。

「自分たちの手作り文芸誌で、十万部目指そうとしてるんですよ」

「十万部ですか？ ソレはスゴいですね」

著名な文芸誌、雑誌もそんなに売れていない中、今月やつと五百部刷った同人誌が十万部は夢のまた夢。流石に吹聴しすぎだと止めにかかるが、「いいじゃないですか。目標はデッカク行きましようよ」と店主がキラキラした目で肯定してしまう。

コレはどうやら、とんでもないことになりそうだ。

初出 令和三年一〇月二五日 NXX (旧サイト) にて公開